



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

**札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor***

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	統合失調症患者の妄想的観念に影響を与える要因：妄想的患者の主題による相違の検討
Author(s)	村上, 元 ; 森元, 隆文 ; 西山, 薫 ; 池田, 望
Citation	札幌保健科学雑誌, 第 7 号:25-30
Issue Date	2018 年 3 月
DOI	10.15114/sjhs.7.25
Doc URL	
Type	Departmental Bulletin Paper
Additional Information	
File Information	n2186621X725.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

原 著

## 統合失調症患者の妄想的観念に影響を与える要因 — 妄想的観念の主題による相違の検討 —

村上 元<sup>1,2)</sup>, 森元隆文<sup>3)</sup>, 西山 薫<sup>4)</sup>, 池田 望<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 医療法人社団楽優会札幌なかまの杜クリニック

<sup>2)</sup> 札幌医科大学大学院保健医療学研究科

<sup>3)</sup> 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

<sup>4)</sup> 北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科

妄想的観念はその主題に基づいて分けることができる。負の感情価の主題を持つ観念は被害妄想的観念となり、正の感情価の主題を持つ観念は誇大妄想的観念となる。妄想的観念は主題の相違によりその発生メカニズムが異なると想定されている。そこで、本研究では、被害妄想的観念は「疎外」「被害」の主題を持つ観念で、誇大妄想的観念は「被好意」「庇護」「他者操作」「自己肯定」の主題を持つ観念で構成されると想定し、各6つの主題に対する感情と原因帰属の影響を検討した。対象は統合失調症患者48名であり、全ての対象に妄想的観念チェックリスト、原因帰属尺度、気分調査票短縮版による測定を実施した。

その結果、正あるいは負の感情価の主題を持つ妄想的観念ごとに抑うつや怒りなど共通する影響要因が存在した一方で、各6つの主題ごとに異なる影響要因も存在した。以上のことから、妄想的観念の主題に応じた介入を展開することが望ましいと言える。

キーワード：統合失調症、妄想的観念、原因帰属、感情

## The factors affecting delusional ideation : An examination of differences in delusional ideation by theme

Tsukasa MURAKAMI<sup>1,2)</sup>, Takafumi MORIMOTO<sup>3)</sup>, Kaoru NISHIYAMA<sup>4)</sup>, Nozomu IKEDA<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup> Sapporo Nakamanomori Clinic

<sup>2)</sup> Graduate School of Health Sciences, Sapporo Medical University

<sup>3)</sup> Department of Occupational Therapy School of Health Sciences Sapporo Medical University

<sup>4)</sup> Department of Psychology for Well-being, School of Social Welfare, Hokusei Gakuen University

It is possible to classify delusional ideations by theme. Ideations with negative emotional valence are classified as persecutory delusional ideations, and ideations with positive emotional valence are classified as grandiose delusional ideations. The mechanisms for the generation of delusional ideations are assumed to vary according to theme.

In this study, persecutory delusional ideations are assumed to have two themes (alienation and persecution), and grandiose delusional ideations have four themes (guardedness, self conceit, favoredness, and other-manipulation-of-others). This study examined the effects of emotion and causal attribution on these six themes.

Subjects consisted of 48 schizophrenia patients who were assessed using the Delusional Ideation Check-List (DICL), scale of causal attribution, and Profile of Mood States (POMS).

The results showed the existence of influential factors (e.g. depression and anger) that are common to each of the six themes. On the other hand, each ideation theme also demonstrated specific influential factors.

These results suggest that the intervention for delusional ideation should be adapted according to the theme.

Key words : schizophrenia, delusional ideation, causal attribution, emotion

Sapporo J. Health Sci. 7:25-30(2018)

DOI:10.15114/sjhs.7.25

## I. 研究の背景

妄想とは、「外的現実に対する間違った推論に基づく誤った確信であり、その矛盾を他のほとんどの人が確信しており、矛盾に対して反論の余地のない明らかな証明や証拠があるにもかかわらず、強固に維持される。(中略)」<sup>1)</sup>と定義される。統合失調症患者においては、外出の困難など生活上の不応にしばしば妄想が存在することが知られている<sup>2)</sup>。そのため、妄想は治療を行う上で重要な要因の一つと言える。

妄想の研究においては、Strauss<sup>3)</sup>が、妄想は「症状有り」と「症状無し」を両極とするスペクトラムであり、本研究もこの立場にならない、丹野ら<sup>4)</sup>と同様に妄想と妄想様観念を区別せず両者を合わせて妄想的観念という表現を用いている。

### 1. 妄想的観念の主題

妄想的観念の内容は、被害か誇大の2種類の主題に大別できる<sup>1)</sup>。石垣らは、統合失調症患者の代表的な妄想的観念としての被害妄想的観念を負の感情価、誇大妄想的観念を正の感情価を持つと考え、さらにそれらを細分化した<sup>4,5)</sup>。

被害妄想的観念とは、患者の中では脅威の信念として概念化されたものと考えられている<sup>6)</sup>。DSM-5によれば、自分が襲われる、苦しめられる、だまされる、迫害される、または陰謀を企てられているということが中心的な主題となっている妄想的観念である<sup>1)</sup>。被害妄想的観念は「他者→自己」に向けられた関係性が主題である<sup>5)</sup>。さらに、主に非現実的な他者と自己の関係性を示す「被害観念」と、周りの人が自分を中傷、疎外しているという内容を含む現実的な他者と自己の関係性を示す「疎外観念」に石垣は分類している<sup>4,5)</sup>。

一方で、誇大妄想的観念は、肥大した価値、力、知識、同一性、または神や有名人と特別な関係があるという妄想的観念である<sup>1)</sup>。石垣は、誇大妄想的観念については、自己-他者において両方向の主題が扱われているとし、「他者→自己(自己中心的な観念:被好意観念,庇護観念)」「自己→他者(能力に関する誇大的な観念:他者操作観念)」「自己完結(能力や血統に関する誇大的な観念:自己肯定観念)」といった分類を述べて、誇大的な妄想的観念をより詳細な主題ごとに検討する必要性を述べている<sup>5)</sup>。

### 2. 妄想的観念のメカニズムと主題ごとの比較

さて、被害妄想的観念と誇大妄想的観念を比較する研究としては、例えば、入院患者を対象としたAppelbaumらや、大学生を対象とした森本らの調査があり、確信度、抵抗感、違和感、心的占有度など妄想的観念の形式的側面は詳細な検討がなされてきた<sup>7,8)</sup>。

しかし、被害妄想的観念は「被害観念」「疎外観念」から、また、誇大妄想的観念は「被好意観念」「庇護観念」「他者操作観念」「自己肯定観念」といった複数の主題から構成されると考えられるにも関わらず<sup>5)</sup>、YamauchiやGaretyらの調査は妄想的観念を被害妄想的観念と誇大妄想的観念といった大きな主題でのみ捉えている<sup>9,10)</sup>。すなわち、形式的側面の研究は進められているが、主題については「被害妄想的観念」と「誇大妄想的観念」と言った大きな主題のみで捉えられた研究が多い。以上のことから、妄想的観念の主題に応じた影響因をより詳細に検討することにより、対象者の抱える妄想的観念の主題に応じた介入に寄与すると考えられる。

### 3. 研究の目的

被害妄想的観念や誇大妄想的観念の発生・維持のメカニズムとしては、感情や推論のバイアスが影響する要因として共通して検討されてきた<sup>6,11,12)</sup>。感情として不安や抑うつを取り上げることが多いが、他にも怒り感情を取り上げるなど検討要因は広がってきており<sup>9,13)</sup>、多様な感情面の把握も意義がある。また、出来事に対する原因の説明である原因帰属<sup>14)</sup>もこれまでの妄想的観念の研究において多く調査されてきた重要な要因の一つである<sup>5,6)</sup>。

以上より、本研究は、統合失調症患者を対象とし、妄想的観念の代表的な主題として「疎外観念」「被害観念」「被好意観念」「庇護観念」「他者操作観念」「自己肯定観念」について測定できるDelusional Ideation Check List (DACL)<sup>4)</sup>を用い、それぞれの主題に影響を与える要因について調査することを目的とする。

## II. 方 法

### 1. 調査対象者・調査機関

A県内の医療機関に通院中の統合失調症患者を対象とした。また、取り込み条件として、過去6か月間精神科に入院がなく、過去3ヶ月間に薬物療法において主剤の変更がない、20歳から65歳、脳器質的障害・精神遅滞・および物質使用障害がない者とした。調査期間は2013年5月から9月であった。

### 2. データ収集

研究協力施設にポスターを掲示し、研究協力者を募集した。研究者が対象者に研究の説明を行い、同意を得られた場合に個室にてアンケート調査を実施した。使用する尺度は自己記入式の尺度であるが、対象者が質問紙の内容を理解できないことも想定されたため、研究者が対象者をサポートしながら質問紙を実施した。回答の回収率は100%だった。

### 3. 倫理的配慮

調査研究の依頼においては、協力が強制ではないこと、研究へ協力しなくても不利益が生じないこと、個人情報には厳重に保護されること、さらに本研究の内容について、書面および口頭でも説明し、同意を得た上で研究を実施した。なお、本研究は執筆者が所属する札幌医科大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号24-2-94）。開示すべき利益相反状態は存在しない。

### 4. 使用する尺度

1) 妄想的観念チェックリスト DICL<sup>4)</sup>を用いた。広範囲の妄想的観念を扱う自己記入式の尺度であり、臨床群にも使用されている<sup>4)</sup>。8因子51項目のうち、本研究では、「疎外観念尺度」「被害観念尺度」「庇護観念尺度」「自己肯定観念尺度」「被好意観念尺度」「他者操作観念尺度」の6尺度41項目を用いる。「全くない」から「いつもある」までの5件法で測定した。

2) 原因帰属 Expanded Attributional Style Questionnaire (以下EASQ)<sup>14,15)</sup>に加えて、Internal Personal and situational attributions questionnaire (IPSAQ)<sup>16)</sup>を参考に作成した3項目を追加した。EASQは、統合失調症患者にも用いられ<sup>16)</sup>、また、内的整合性、再検査信頼性は確認されている<sup>15)</sup>。EASQは被検者が22場面の否定的出来事に対してその結果に至った主要な原因を一つ考え、内在性、安定性、全般性、統制感の4下位尺度について7件法で評定する。安定性、全般性、統制感についてはEASQの下位尺度をそのまま用いた。それぞれは得点が高い場合に安定、特異的な帰属の傾向があり、低い統制感ということを示すという判定になる。EASQにおける内在性の測定は、内的-外的の一次元のみのため、より詳細に測定するために、22場面における主要な原因を内的、外的-人的、外的-状況的という3次元について測定した。質問項目はIPSAQを参考に、「あなたについての何が原因ですか？(内的)」「他の人についての何が原因ですか？(外的-人的)」「状況についての何が原因ですか？(外的-状況的)」の3項目を作成した。得点は7件法で評定し、得点が高いほど、その帰属の傾向の強さを示す。

3) 感情 気分調査票短縮版 (Profile of Mood States；以下POMS短縮版)<sup>18)</sup>を用いた。過去1週間について「緊張-不安」「抑うつ-落ち込み」「怒り-敵意」「活気」「疲労」「混乱」の6下位尺度30項目を、「全くなかった」-「非常に多くあった」の5件法で測定した。

### 5. 分析方法

妄想的観念と原因帰属、感情との関係を調べるために、スピアマンの相関分析を実施した。次に、本研究で使用した尺度得点の妄想的観念に対する影響を検討するため、目的変数をそれぞれ、DICLの「疎外観念尺度」「被害観念尺度」「庇護観念尺度」「自己肯定観念尺度」「被好意観念尺度」

「他者操作観念尺度」とし、説明変数を原因帰属尺度の「内的」「外的-人的」「外的-状況的」「安定性」「全般性」「統制感」、POMS短縮版の「緊張-不安」「抑うつ-落ち込み」「怒り-敵意」「活気」「疲労」「混乱」とした、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した。分析には、IBM SPSS Statistics 22.0を用いた。

## III. 結 果

### 1. 対象書の属性と各変数の記述統計

研究には統合失調症患者48名（男性30名、女性18名）が参加した。平均年齢は41.56歳 ( $SD=8.87$ )、入院回数は3.46 ( $SD=3.11$ )回、服薬量 (CPZ) は、555.31 ( $SD=359.55$ ) mg/日であった。DICL、原因帰属尺度、POMS短縮版それぞれの下位尺度の合計得点を尺度得点とした (表1)。

表1 各変数の基本的統計量

		得点範囲	平均 (SD)
DICL	疎外観念	7-35	16.27 (7.11)
	被害観念	7-35	11.98 (5.08)
	庇護観念	4-20	8.46 (4.37)
	自己肯定観念	5-25	8.04 (3.42)
	被好意観念	5-25	7.77 (3.01)
	他者操作観念	4-20	7.00 (2.29)
POMS	緊張-不安	0-20	7.69 (5.32)
	抑うつ-落ち込み	0-20	5.56 (5.45)
	怒り-敵意	0-20	4.27 (4.49)
	活気	0-20	6.58 (4.72)
	疲労	0-20	8.98 (6.15)
	混乱	0-20	7.90 (4.72)
原因帰属尺度	内在性		
	内的帰属	22-154	113.48 (14.66)
	外的-人的帰属	22-154	77.46 (16.10)
	外的-状況的帰属	22-154	101.69 (17.61)
	安定性	22-154	111.33 (17.80)
	全般性	22-154	102.81 (22.96)
統制感	22-154	86.92 (23.12)	

### 2. 妄想的観念と原因帰属、感情との関係

スピアマンの相関分析の結果、各観念は全ていずれかの尺度と有意な、または、有意傾向の関係が認められた ( $r=-0.51\sim 0.78$ ,  $p=0.05\sim 0.001$ ) (表2)。

### 3. 妄想的観念と原因帰属、気分との影響

相関分析の結果を踏まえ、各要因間の因果関係を調べるためにステップワイズ法による重回帰分析を実施した (表3)。

負の感情価の疎外観念に対しては、抑うつ-落ち込み ( $\beta=0.49$ ,  $p<0.001$ ) とEASQの全般性 ( $\beta=0.47$ ,  $p<0.001$ )、

表2 各変数における相関分析の結果

		疎外観念	被害観念	庇護観念	自己肯定観念	被好意観念	他者操作観念
DICL	疎外観念	-					
	被害観念	0.58***	-				
	庇護観念	0.34	0.50***	-			
	自己肯定観念	0.13	0.16	0.15	-		
	被好意観念	0.25	0.35*	0.34*	0.54***	-	
	他者操作観念	0.12	0.25	0.14	0.78***	0.50***	-
POMS	緊張-不安	0.55***	0.56***	0.30**	0.1	0.11	0.15
	抑うつ-落ち込み	0.57***	0.56***	0.30**	0.24	0.22	0.25
	怒り-敵意	-0.48**	0.59***	0.18	0.25	0.39**	0.29*
	活気	-0.33*	-0.23	0.03	0.04	0.27	0.21
	疲労	0.46**	0.50***	0.17	0.24	0.17	0.28
	混乱	0.53***	0.64***	0.22	0.16	0.2	0.24
原因帰属	内的	0.15	0.19	0.13	-0.16	-0.22	-0.14
尺度	外的-人的	0.31*	0.11	-0.03	-0.01	0.15	0.16
	外的-状況的	0.35*	0.23	0.14	-0.01	0.31*	0.11
	安定性	0.43**	0.26	0.1	-0.06	0	-0.15
	全般性	0.59***	0.27	0.17	-0.13	-0.03	-0.21
	統制感	-0.48**	-0.51***	-0.35*	-0.16	-0.12	-0.11

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$

表3 各観念を目的変数としたステップワイズ法を用いた重回帰分析の結果

	標準化係数( $\beta$ )					
	疎外観念	被害観念	庇護観念	自己肯定観念	被好意観念	他者操作観念
緊張-不安						
抑うつ-落ち込み	0.49***	0.69***				
怒り-敵意				0.38**	0.53***	0.41**
活気					0.33**	
疲労						
混乱						
内的						
外的-人的	0.21*					
外的-状況的						
安定性						
全般性	0.47***					
統制感			-0.33*			-0.32*
$R^2$	0.63	0.48	0.11	0.14	0.31	0.22
$R^2$ (adjusted)	0.60	0.46	0.09	0.12	0.27	0.19
$F$	24.72***	41.65***	5.59*	7.60**	9.88***	6.51**

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$

外的-人的 ( $\beta=0.21$ ,  $p < 0.05$ ) が有意な変数として採択された ( $R^2=0.60$ )。被害観念に対しては、抑うつ-落ち込み ( $\beta=0.69$ ,  $p < 0.001$ ) が有意な変数として採択された ( $R^2=0.46$ )。

正の感情価の庇護観念に対しては、統制感 ( $\beta=-0.33$ ,  $p < 0.05$ ) が有意な変数として採択された ( $R^2=0.09$ )。自己肯定観念に対しては、怒り-敵意 ( $\beta=0.38$ ,  $p < 0.01$ ) が有意な変数として採択された ( $R^2=0.12$ )。被好意観念に対

しては、怒り-敵意 ( $\beta=0.53$ ,  $p < 0.001$ ) と活気 ( $\beta=0.33$ ,  $p < 0.05$ ) が有意な変数として採択された ( $R^2=0.27$ )。他者操作観念に対しては、怒り-敵意 ( $\beta=0.41$ ,  $p < 0.005$ ) と統制感 ( $\beta=-0.32$ ,  $p < 0.05$ ) が有意な変数として採択された ( $R^2=0.19$ )。

各分析は、Durbin-Watson比とVIF値を確認し、多重共線性の問題はないと判断した。

## IV. 考 察

### 1. 負の感情価を持つ主題の妄想的観念に対する影響要因

本研究では、統合失調症患者を対象として妄想的観念の代表的な主題である被害妄想的観念と誇大妄想的観念を、被害妄想的観念は「疎外観念」「被害観念」に、誇大妄想的観念は「被好意観念」「庇護観念」「他者操作観念」「自己肯定観念」の主題により構成される妄想的観念と理解し、それぞれの主題に影響を与える要因について検討した。その結果、主題ごとに異なる要因が影響を与えることが示唆された。また、先行研究では、負の感情価を持つ被害妄想的観念と正の誇大妄想的観念のメカニズムに差異があることが示されている<sup>7-10</sup>。本研究でも負の感情価を持つ「疎外観念」「被害観念」と、正の感情価を持つ「被好意観念」「庇護観念」「他者操作観念」「自己肯定観念」と分け、2種類の主題を比較したが、それぞれに特有な結果を示し、本研究も先行研究の知見と一致した。

負の感情価を持つ2種類の観念に対し、感情の要因では、抑うつ-落ち込みが共通して影響を与えた。Appelbaumらは、被害妄想的観念が否定的感情に特徴づけられると述べ<sup>7</sup>、また、先行調査でも被害妄想的観念に対する抑うつの影響の大きさが指摘されていることから<sup>6,10</sup>、本研究の結果はこれらの知見と一致するものである。したがって、負の感情価を持つ妄想的観念を強く有する患者の治療では、抑うつ傾向といった感情面への介入も必要と考えられる。

また、原因帰属との関連において全般性次元が、負の感情価を持つ2種類の主題のうち疎外観念に影響を与えた。全般的な帰属の傾向は、ある原因がどの出来事でも共通して起こりうると考える傾向を作り出す。つまり、全般的帰属を強く行う場合に、広範囲に及ぶ問題を結果として生じるため<sup>14</sup>、様々な場面において負の感情価の妄想的解釈を生み出しやすくなると言える。負の感情価を持つ妄想的観念に対しては、例えば、認知行動療法に基づいた介入により患者がバランスの良い帰属を行えるような支援が有効と考えられる。

一方で、これまでの妄想的観念と原因帰属の関係を調査した研究では、外的-人的帰属と被害妄想的観念との関係が指摘されてきた<sup>6,7</sup>。本研究では、外的-人的帰属は疎外観念に影響を示した。疎外観念の項目は、「周りの人はだれも信用できない、という疑い」といった現実的な他者との関係性を問うている。否定的出来事の外的-人的帰属傾向は、原因を他者に求める傾向を表しており、「他者→自己」に向けて生じる被害妄想的観念の「自己-他者図式」とも一致する。一方で、外的-人的帰属の影響が認められなかった被害観念は「神様や霊などが、私の行動を邪魔している、という感じ」といった非現実的な他者との関係性を聞く項目も含む。これらは、統合失調症患者において生じる

自我障害の影響も含まれた項目であり、神様や霊といった漠然と特定できない他者による影響を聞いている<sup>5</sup>。したがって、その原因を求める際に他者とは言い切ることが難しく、外的-人的帰属傾向の影響が関与しなかったと思われる。

### 2. 正の感情価を持つ主題の妄想的観念に対する影響要因

正の感情価を持つ主題と感情の要因では、「被好意観念」「庇護観念」「他者操作観念」「自己肯定観念」のうち、怒り-敵意が「被好意観念」「他者操作観念」「自己肯定観念」の3つの主題に影響を与えた。先行研究では、否定的な感情の少なさが誇大妄想的観念に影響を与えると指摘されており、本研究と異なる結果となった<sup>14</sup>。感情と誇大妄想的観念に関する先行研究によれば、自尊心の役割に注意が向けられている<sup>12</sup>。自尊心のレベルや安定性が、怒りや敵意の予測因になるという指摘もある<sup>10</sup>。自尊心は、今回は影響要因に取り上げていないが、怒りや敵意が誇大妄想的観念に与える影響も視野に入れ、今後自尊心を介在要因に含めた検討が必要である。一方で、怒りは被害妄想的観念との関連が示唆されている<sup>9</sup>。被害妄想的観念と誇大妄想的観念は併存する場合があります<sup>12</sup>、本研究でも負の感情価を持つ妄想的観念と正の感情価を持つ妄想的観念の一部の尺度において有意な正の相関関係が見られた。このことから、怒り-敵意は2つの妄想的観念に共通する影響因の一つとなる可能性があると考えられる。

正の感情価を持つ主題に対する原因帰属の要因の影響は、正の感情価の各観念に対しておしなべて弱いものであった。誇大妄想的観念は、肯定的出来事の内的帰属との関係が指摘されているが<sup>12</sup>、今回は否定的出来事のみを扱ったことも影響していると考えられるため、肯定的出来事も含めた上記要因の検討が必要とされる。

また、被害妄想的観念であるところの「疎外観念」と「被害観念」は、ネガティブな感情や、原因帰属においても共通した要因からの影響が認められた。一方で、誇大妄想的観念のうち「被好意観念」「他者操作観念」「自己肯定観念」は怒り-敵意から影響を受けていたが、「庇護観念」は影響されていないなど、被影響因は異なる結果となった。このことから、誇大妄想的観念と一括りに検討せずに、観念ごとの検討を行う必要性が確認された。

### 3. 妄想的観念を持つ統合失調症患者への支援

以上のことから、妄想的観念の各主題によって影響を受ける要因が異なり、負の感情価の妄想的観念では、抑うつ-落ち込みが重要な要因であり、正の感情価では怒り-敵意が影響を持ちやすい。したがって、妄想的観念を持つ対象者への支援を実施する上で、どのような主題の妄想的観念を持っているのかを評価し、その主題に応じた感情コントロールなどの介入を展開することが望ましいと言える。

#### 4. 研究の限界と今後の課題

本研究の課題として、今回取り上げなかった要因の再検討が挙げられる。例えば、先にも述べた原因帰属の題材としての肯定的出来事や自尊心がそれである。正の感情価の妄想的観念の説明率は低く、本研究に含まれない要因の影響が示唆されている。したがって、影響を与える要因について再検討が必要である。しかし、負の感情価の妄想的観念については、本研究で扱った要因で一定の説明率を得ることであった。部分的にはあるが、妄想的観念が感情価によって異なる要因に影響を受けることを示すことができた点については、意義があるといえるであろう。加えて、本研究では性別による影響を検討していない。先行研究では、被害妄想に伴う不安は男性よりも女性のほうが有意に強いことが示されている<sup>20)</sup>。本研究では、男性の協力者数が多く、被害妄想に伴う不安が反映されにくかった可能性がある。今後の研究では性別の影響も検討する必要がある。

#### 引用文献

- 1) American Psychiatric Association (高橋三郎, 大野裕, 染矢俊之 他 訳) : DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 東京, 医学書院, 2014
- 2) Freeman D, Waller H, Harpur-Lewis RA, et al. : Urbanicity, persecutory delusions, and clinical intervention : the development of a brief CBT module for helping patients with persecutory delusions enter social urban environments. *Behav Cogn Psychother* 43 : 42-51, 2015
- 3) Strauss JS : Hallucinations and delusions as points on continua function. Rating scale evidence. *Arch Gen Psychiatry* 21 : 581-586, 1969
- 4) 丹野義彦, 石垣琢磨, 杉浦義典 : 妄想的観念の主題を測定する尺度. *心理学研究* 71 : 379-386, 2000
- 5) 石垣琢磨 : 幻聴と妄想の認知臨床心理学 精神疾患への症状別アプローチ. 東京, 東京大学出版会, 2001, p97-142
- 6) Freeman D. : Suspicious minds : the psychology of persecutory delusions. *Clin Psychol Rev* 27 : 425-457, 2007
- 7) Appelbaum PS, Robbins PC, Roth LH : Dimensional approach to delusions : comparison across types and diagnoses. *Am J Psychiatry* 156 : 1938-1943, 1999
- 8) 森本幸子, 丹野義彦 : 健常者の妄想的観念への多次元のアプローチ-被害妄想的観念と庇護妄想的観念の比較を通して. *心理学研究* 74 : 552-555, 2004
- 9) Yamauchi T : Psychological investigation of the formation and maintenance of persecutory ideation. 東京, 風間書房, 2011, p43-68
- 10) Garety PA, Gittins M, Jolley S, et al. : Differences in cognitive and emotional processes between persecutory and grandiose delusions. *Schizophr Bull* 39 : 629-639, 2013
- 11) Freeman D, Garety PA, Kuipers E, et al. : A cognitive model of persecutory delusions. *Br J Clin Psychol* 41 : 331-347, 2002
- 12) Knowles R, McCarthy-Jones S, Rowse G : Grandiose delusions : a review and theoretical integration of cognitive and affective perspectives. *Clin Psychol* 31 : 684-696, 2011
- 13) 中山詩野 : 認知の歪みが妄想様観念を介して抑うつ・不安・怒りに及ぼす影響. *人間科学研究* 25 : 107, 2012
- 14) Peterson C, Villanova P : An Expanded Attributional Style Questionnaire. *J Abnorm Psychol* 97 : 87-89, 1988
- 15) 成田健一, 嶋崎恒雄, 今田寛 : EASQ (Expanded Attributional Style Questionnaire) を用いた帰属様式の測定-その信頼性および抑鬱との関係-. *日本心理学会第54回大会発表論文集* 135, 1990
- 16) Kinderman P, Bentall RP : A new measure of causal locus : the internal, personal and situational attributions questionnaire. *Person Individ Diff* 20 : 261-264, 1996
- 17) Yamada S, Suzuki K : Application of Empowerment Scale to patients with schizophrenia : Japanese experience. *Psychiatry Clin Neurosci*. 61 : 594-601, 2007
- 18) 横山和仁, 浦川加代子, 三木明子. 他 : POMS短縮版 手引きと事例解説. 東京, 金子書房, 2005, p1-105
- 19) Kernis MH, Grannemann BD, Barclay LC : Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *J Pers Soc Psychol* 56 : 1013-1022, 1989
- 20) 津田恭充 : 被害妄想に伴う感情を測定する尺度の開発. *パーソナリティ研究* 19 : 245-254, 2011